

「政治的アイデンティティ」によって解明される パワーとアイデンティティの関係

文・写真
太田好信

共同研究 ● 「政治的アイデンティティ」とは何か？——解放運動としての先住民運動（2007-2010）

本共同研究全体の成果は2011年度に昭和堂から『グローバル化／アイデンティティの力——民主化・新自由経済体制の拡散と文化の隆盛』（仮題）という題名の論文集において発表されるが、2010年度はその論集作成に向けて検討を進めているところである。この共同研究会の個別の発表に関しては、そちらの論集を参照していただくことにしたい。また、この研究会を構想するに至った経緯などについては、すでに『民博通信』No.125（2009）において報告している。ここでは、それらの成果や報告との重複をさけるため、政治的アイデンティティという考え方について共同研究会において議論した結果、明らかになった三点だけを確認することにとどめたい。

本共同研究会では、政治とアイデンティティという二つの概念の意味は了解済みとは考えず、それらの意味を再検討することから出発した。当然、政治的アイデンティティと類似した概念である「アイデンティティの政治」との差異も検討した。

検討の結果、第一点として、政治的アイデンティティと文化的アイデンティティとは異なるという認識を得た。政治的アイデンティティは、文化——そのなかには、慣習だ

けではなく言語や宗教を含める——や歴史を共有することによって形成されているのではない。文化は、拘束性と同時に、多様な実践を可能にする創造性も含意する。多元的アイデンティティ、流動的アイデンティティ、異種混交的アイデンティティなどに関する諸理論は、文化のレベルにおいて展開されてきたことになる。それに反して、政治とはまさにパワーと資源分配をめぐる闘争であり、文化レベルで機能するそれらの概念は、自他との峻別が必要な政治状況にはなじまないのではなからうか。

ただ、ある状況においては、文化的アイデンティティが政治化することは十分に想定されうる。その場合、問われるべきは、どのような状況において文化的アイデンティティが政治化され、政治的アイデンティティに変容するのか、という疑問である。アイデンティティを政治の効果として把握することになる。

第二点は、政治的アイデンティティという概念が、個人のアイデンティティは人種、エスニシティ、ならびにジェンダーなどによってあらかじめ規定されているという前提から解放されており、パワー論との再節合により形成されたということである。つまり、政治的アイデンティティ

は、アイデンティティを社会制度によって構成されたパワー関係という網目の中で再考するための概念である。このようにアイデンティティをパワーの問題と連結して検討する視点は、リベラリズムの欠陥を内側から乗り越え、それを継承する批判的リベラリズムという批判理論の系譜一般に連なる。もちろん、パワーと節合させることにより批判理論の系譜に再配置されているのは、アイデンティティだけではない。

一例として、「政治的人種」という考え方がある。人種という概念は、その非科学性が20世紀初頭から指摘されてきたにもかかわらず、いまでも亡霊のようにその存在を感じるものがしばしばある。日本ではそれほどでもないかもしれないが、アメリカ合衆国のような多様な移民や先住民を含むリベラル民主制を標榜する近代国家では、人種は禁句となっている。禁句である分だけ、人種によって起きる排除や不利益の経験を語りづらくなっている。アメリカ合衆国の政治



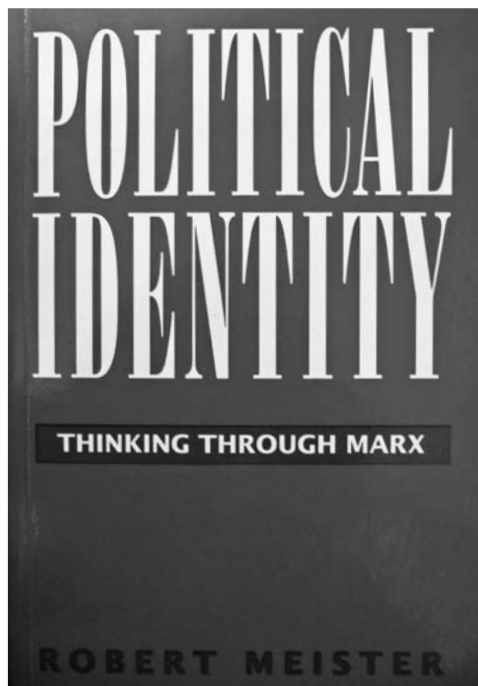
2007年、グアテマラの総選挙。リゴベルタ・メンチュウも「グアテマラ出会いの党」から出馬。彼女の演説を前にして、マヤ・ロック・バンドの演奏もあった。

に関する報道などではしばしば耳にする「人種カードを切る」——人種を問題化し、自分にとり有利に議論を進める——ことは、人種が禁句になっているリベラル民主制国家だからこそ存在する表現といえる。人種を科学による啓蒙の対象として、それを消滅に追いやるという目標を目指すのではなく、人種をパワーと関連づけることにより、人種は社会変革の方向性を示す兆候、すなわち人種という考えが社会においていまだに流通している理由を、人種による排除が存在している証拠として読み替える道を拓くべきだろう。人種による差別構造——パワーや資源へのアクセスの不均衡——がなくなれば、人種という概念も消滅するに違いない。だが、そのような社会は、いまだに訪れてはいないことになる。

第三点は、政治的アイデンティティが構築主義的発想に根差しているという事実である。広義の構築主義は、対象に内在する諸特性を本質として捉えず、社会的過程によって形成されたものとする立場をとる。アイデンティティの形成を構築主義的視点から考察するとは、社会の諸制度が、どの帰属意識を自然化し、有意義なものとするかという、いわばいかに生きられた経験が構造化されるか、という疑問に答えることになる。

しかし、それは、従来の構築主義的理論のように、アイデンティティそのものが(本質的に、つねに)流動的であるという主張とは異なり、異なったアイデンティティを顕在化させるコンテキストが流動的であるということの意味する。たとえば、クリフォード・ギアツがもっともよく表現しているように、人間のアイデンティティを形成するのは文化であるという考えは、しばしば生物学により基礎づけられてきた。だが、構築主義の視点からアイデンティティと文化との関係を読み替えれば、両者を生物学的根拠によって自然化せず、文化はアイデンティティを形成するもっとも重要な要因となりうる場合もあると考えることができる。どのようなコンテキストにおいて文化は自然化されるのであろうか、という問いを立てることが可能になる。文化とアイデンティティとの関係を自然化しない視点から見れば、紛争の原因をアイデンティティ同士の衝突に求める説明は、根拠を失うことになる。

政治的アイデンティティという視点は、文化は人間のアイデンティティの核心である、という考えからわたしたちを解放し、どのような状況において文化がそのような力をもつと考えられるようになるのだろうか、という別の疑



本共同研究会の中心概念を構成する際に役立ったロバート・マイスター著の『政治的アイデンティティ』(ブラクウェル社 1990年、現在は絶版)。

問を設定することを可能にするのである。しばしば、民族紛争やナショナリズムなど、政治的行動を文化によって説明しつくそうとする発想が広がる中、政治的アイデンティティはそのような状況に対して批判的に介入する。

以上に述べた点からも、政治的アイデンティティという考え方の大きな特徴は、民族紛争や部族対立など、しばしばアイデンティティの主張を中核にすえた集団同士による衝突であると解釈されてきた現象に対して、それとは異なった理解の方法を示唆することである。政治的アイデンティティは、文化を個人の原初的アイデンティティとは考えず、そのようなアイデンティティが形成されるのは国家による構造化がおこなわれた結果であるとする。文化的実践によりパワーや資源へのアクセ

スが制限され続けてきた人々が存在するからこそ、その是正を求め、社会運動の中核に文化が重要な要素を占めるようになるのである。

これまで財産の有無、ジェンダー、肌の色、「ネイティブ(=被植民者)」というカテゴリーによって、パワーや資源へのアクセスを制限されてきた人々がいた。それらを是正しようとしたのが、それぞれの排除のマーカ―を中心に集団化した労働者運動、女性参政権運動、奴隷解放や公民権運動、そして脱植民地化の運動であった。いまでも、文化的実践により同様の排除がおこなわれている。本研究会では、そのような排除の一例として先住民というアイデンティティを考えた。

先住民運動は、リベラル民主制国家の中では、どのような位置を占めるのだろうか。先住民運動をどのように把握すべきだろうか。集団的権利を主張する先住民運動は、個人の自由が前提にあるリベラル民主主義と、どのような関係にあるのだろうか。本共同研究会の最終目標は、これらの疑問の解明であった。

本共同研究会は、アイデンティティを一度文化から脱^{ディスロケイト}白させ、今度はパワーと再節合することにより、21世紀においてわたしたちの歴史認識を逆なでするように復活してきた先住民という人々の世界史的存在意義を再考しようとしてきたのである。

おおた よしのぶ

九州大学大学院比較社会文化研究院教授。専門は、文化人類学。表象理論と人類学史、中米先住民研究、アメリカ研究など。著書に、『増補版・トランスポジションの思想』(世界思想社 2010年)、『増補版・民族誌的近代への介入』(人文書院 2009年)、『亡霊としての歴史』(人文書院 2008年)、『人類学と脱植民地化』(岩波書店 2003年)、『メイキング文化人類学』(共編著 世界思想社 2005年)など。